



秋芽を利用したてん茶栽培技術を開発

— 低迷するせん茶産地の安定経営を図ります —

開発の背景・ニーズ

近年、せん茶の消費量は年々減少し、価格が低迷しているため、東三河を中心とするせん茶産地の経営は不安定になっています。一方、抹茶の原料となるてん茶は食品加工用として需要が増加しています。そこで、せん茶生産茶園において秋に刈り捨てられる新芽（秋芽）を利用したてん茶の生産法を開発しました。

成果の内容

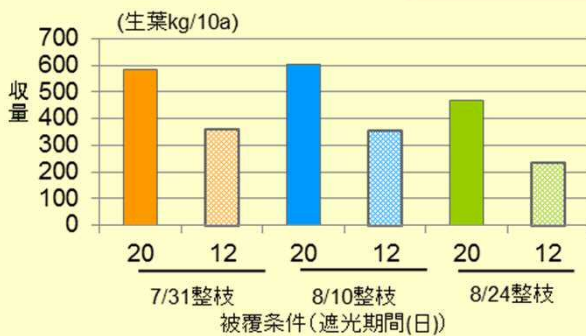
てん茶生産に適した秋芽を収穫するための夏季の整枝（刈ならし）を8月上中旬に実施し、秋芽の遮光を20日程度にすることにより、秋芽の生育が良好で収量が増加しました。また、外観品質も高く、色が鮮やかで食品加工用としての利用が有望です。遮光による翌年の一番茶への影響もなく、品質と収量のバランスがとれる秋芽の利用法を確立できました。



被覆時の生育とてん茶の品質

整枝日	遮光期間	被覆時開葉数	外観調査*	全窒素 (%/DW)
7月31日	20	4.5	13.5	4.4
	12	4.5	15.5	4.8
8月10日	20	4.3	15.5	4.5
	12	4.3	18.0	4.8
8月24日	20	2.6	19.0	4.7
	12	2.6	20.0	5.7

* 20点満点の相対評価



遮光開始:
9月18日
摘採日:
20日遮光-
10月8日

12日遮光-
9月30日

整枝時期と秋芽の収量

愛知県農業への貢献

東三河を中心とするせん茶生産地域において、秋芽を利用したてん茶生産を導入することにより、生産者の収益増が図れます。経営の安定化と茶産地の維持に貢献するとともに、愛知県のとん茶産地としての優位性を強化します。

【この研究は「磯田園(株)との共同研究」で実施しました】